

戦後七〇年と女たちの物語（二） —赤坂真理『東京プリズン』試論—

岡 英里奈

【要旨】

本稿は、赤坂真理『東京プリズン』を対象に、二〇一〇年前後における戦争の語り、その中でも特に女性を中心とした物語のもつ問題について考察しようとするものである。戦後七〇年を迎えるこの時期は、女性作家による女性の視点から描かれた戦争の語りが頻出している。その中で、近年戦後日本論や天皇制論をめぐる論客としても目覚ましい活躍を見せている赤坂は、いかに位置づけられるだろうか。本論では、赤坂の描く戦後日本像や天皇像に対し、主に二つの論点を提示した。その二点とは、『東京プリズン』における「デイベート」という舞台装置への疑問と、赤坂における言語観の両義性である。これによって、赤坂とより「内へ、内へ」と向かっていく近年の日本の政治状況やメディア状況との親和性を指摘し、さらには彼女がどのように書かざるを得ない理由とは何かという、表層的な批判を超えた、内在的批評の可能性について考察した。

【キーワード】

戦後七〇年 〈女性〉の語り 赤坂真理 『東京プリズン』 『愛と暴力の戦後とその後』

【本論】

はじめに

本稿は、赤坂真理『東京プリズン』（河出書房新社、二〇一二年七月）を対象に、二〇一〇年前後における戦争の語り、その中でも特に女性を中心とした物語のもつ問題について考察しようとするものである。戦後七〇年を迎えるこの時期の、女性作家による女性の視点から描かれた戦争の語りの頻出と、それに対する意義や問題点については、すでに拙稿「戦後七〇年と女たちの物語（一）—中島京子『女中譚』『小さいうち』（『生活文化研究所報告』二〇一九年三月）において、その考察の過程を示したつもりである。二〇一二年、毎日出版文化賞、司馬遼太郎賞、紫式部文学賞といった数々の文学賞を受賞した『東京プリズン』は、その問題意識を深めていく上で、重要な位置にある作品といえる。さらに本作以降、赤坂は戦後日本論や天皇制論をめぐる論客としても目覚ましい活躍を見せており、二〇一九年二月には、本作の続編といえる『箱の中の天皇』（河出書房新社）を上梓している。赤坂の言説を同時代の流れの中にいかに位置づけるか、その特異性や問題点は何かと論じることが、極めて重要な意味をもつといえよう。だが、そのためにはいくつかの遠回りが必要と思われる。というのも、以下で述べていくように、赤坂の描く戦後日本像や天皇像には、より「内へ、内へ」と向かっていく近年の日本の政治状況やメデ

イア状況との親和性が読み取れるためである。しかしながら、単に作品からうかがえる政治思想を批判し、こちらの政治的「正しさ」をもって糾弾したところで、文学研究として十分であるとはいえないだろう。本作の政治性を整理した上で、より内在的な批評のためにはどのような手続きが必要かを考察しなければならない。そこで本稿では、まずは赤坂に対し私が感じた違和感(それ自体は主観的なものであるが)を手がかりにして、より作品の内容に即した内在的な批評のための論点の提出を試みたい。本稿を「試論」と題したのはそのためである。

一・『東京プリズン』概要と先行論

『東京プリズン』は、雑誌『文藝』に二〇一〇年一月から東日本大震災を挟んだ二〇一二年四月にかけて連載され、同年七月、河出書房新社より単行本として刊行された。物語は、二〇〇九年の八月一日、(赤坂本人を思わせる)物書きの主人公・マリが、夢の中でかつての生家の黒電話をとったことに始まる。電話をかけてきたのは、一九八〇年代初頭、ある「失敗」を契機に、理由も説明されないままアメリカのハイスクールに留学させられたかつての自分自身であった。以降、物語は一九八〇年代初頭のアメリカに住む一六歳のマリの視点と、二〇〇九年から二〇一一年の震災直後にかけての東京に暮らす四〇代のマリの視点とが交互に提示、あるいは入り交じるかたちで展開されていく。一六歳のマリには、ハイスクールの進級条件として「天皇の戦争責任」の有無をめぐるディベートが課せられており、東京裁判を模したこのディベートを通し、マリは日本近現代史における「秘密」に向き合っていく。一方で、そのアメリカ体験がトラウマとして残っている四〇代のマリもまた、一九八〇年代や終戦時の母の記憶に「潜る」という行為を通して、あの頃の自身を救い出し、そのトラウマのきつかけとなった母との関係を修復するべく奔走する。

このように、本作はこの史代『この世界の片隅に』(全三巻、双葉社、二〇〇八年一月〜二〇〇九年四月)や中島京子『小さいうち』(文藝春秋社、二〇一〇年五月)など、同時代の女性を視点とした戦争の物語とは明らかにその色彩を異にしている。上記の作品群が、戦時下の中での家庭や台所を視点とした非日常の中の日常を描くことで「大きな歴史」に対する「小さな歴史」を提示しようとするのに対し、『東京プリズン』が問おうとするのは、「天皇の戦争責任」を追求しないままの「戦後日本の復興・成長」という「大きな歴史」そのものである。

本作発表後の好意的な評価も、概ねこの点に集中している。池澤夏樹は本作について「小説にはこんなこともできるのか」と評し、天皇の戦争責任という「そのままでは小説になじまない話題」を文学として別扱した点に本作の意義を認めている⁽²⁰⁾。こうした評価を経て、以後赤坂は、『愛と暴力の戦後とその後』(講談社、二〇一四年五月)をはじめとし、創作の領域だけではなく戦後日本論や天皇論の論客の一人としても活躍の場を広げることとなっている⁽²¹⁾。

しかしながら、こうした賛美の声がある一方で、本作から浮かび上がる赤坂の思想に対する疑問の声もまた存在している。小谷野敦は「反米と天皇」(『文学界』二〇一二年一月)において、「赤坂はこの長編で、最終的には、天皇に対して、母親であるかのような親和感を表明しているとか思え」ず、また池澤や高橋源一郎といった「左翼・リベラル派とみられる」人々がこの作品を高く評価していることに対し、「これはいいよ、「反米」を通しての、右翼と左翼の野合が完成したのか」という懸念を抱くと述べ、同エッセーを「私は『東京プリズン』に、あたかも「反米」を通してロイヤリズムが復興するかのような兆しを感じて恐れを感じる」と結んでいる。また、過去と現在、幻想世界と現実世界が複雑に混じり合う本作の構造を精緻に分析した神村和美「〈新しい神話〉という《神話》」赤坂真理『東京プリズン』(『学芸国語国文学』二〇一四年三月)もまた、「教

育的観点という名目の下に課された〈天皇の戦争責任〉をめぐるデイベーターが、〈私〉にとつていかに過酷な政治的抑圧であったかを物語る」と評価しつつも、本作における「日本帝国主義が植民地としたアジアの国々や、今なお解決されない沖縄問題への眼差しの欠落」を指摘している。

二・「デイベーター」という舞台装置

これらの先行研究と同様に、私もまた『東京プリズン』およびそれとほぼ同時に提出された作者赤坂の戦後日本論について、批判的な眼差しを向ける者の一人である。先の論者の批判に付け加えるならば、『愛と暴力の戦後とその後』における次のような赤坂の語りには、私は強い違和感と反発心を抱く。

これは、研究者ではない一人のごく普通の日本人が、自国の近現代史を知ろうともがいた一つの記録である。

それがあまりにわからなかったし、教えられもしなかったから。

（中略）

これは、一つの問いの書である。

問い自体、新しく立てなければいけないのではと、思った一人の普通の日本人の、その過程の記録である。（赤坂真理『愛と暴力の戦後とその後』講談社、二〇一四年五月、傍線は引用者）

「ごく普通の日本人」と自らの立場を強調する赤坂は、日本近現代史に対する自らの無知を恥じることがない。それは戦後の教育が「教えなかった」から、「教えられなかった」ためである。しかし、それが「ごく普通の日本人」の感覚として妥当なのかは証明しようもなく、「歴史修正主義」が勢いを増す近年の社会状況の中では、安易な歴史教育批判に回収されて

しまふ危険性があるのではないか。またこうした赤坂の戦後教育観は、『東京プリズン』のマリにも共通するものとして描かれている。左記のように「過ちは繰り返しません」という「呪文」を「言・わ・さ・れ・さ・え・し・た」というマリのこの言葉には、戦後教育に対する感情的な反発を読み取ることができるとはならないだろうか。

しかし、学校の授業で習ったろうと言われても、なにせ私たちは現代日本史を習っていない。習ったのはこういうことだけだ。

過ちは繰り返しません。

過ちは繰り返しません。

過ちは繰り返しません。

クラスでいっせいに言わされさせました。

もう二度と戦争はしません。

この呪文が目の前にいる相手に効くなら、何度でも言ってやる。だけれどわかったのは、わたしは意味も効果もない呪文を習っていたということだけだった。（『東京プリズン』第二章、一四一頁）

さらにここでもう一点、本作に対し私が強烈な違和感を抱いた左記の場面に注目したい。

「南京大虐殺はどうだ？ 生体解剖をした七三一部隊は？ アジア諸国で日本の皇軍が犯した虐殺行為は？」

ここだ。同じことの繰り返した。ここが同じ劇の結節点にして分岐点なのだ。

私はここで負けたりしない。ここで絶対、沈黙しない。

私は勝てない。私は勝てない。これは万が一にも私が勝てるようにつくられたゲームではない。絶対、勝てない。

でも、負けない。(『東京プリズン』最終章、五二〇頁)

ここに現れているのは、「デイベート」として「東京裁判」が描き直される本作にとって、日本がアジアに対し行った残虐行為は、アメリカ側が日本(マリ)側を「論破」するための手段であり、マリにとってはデイベートというゲームの中の「難所」に過ぎないということである。本来、ここの南京大虐殺や七三一部隊といった問題は、戦争責任をめぐる問題なのであり、必要なのは「論破」ではなく正確な「事実」の確定とそれにもとづく合意の形成のほうである。けれどもあくまで「デイベート」としてどちらが先に沈黙する¹¹「論破」されるかを戦う本作では、これらの問題は「TENNOU」が憑依したマリによって、「前線の兵士の狂気や跳ねっ返り行動」として処理され、アメリカによる「民間人を消し去る周到な計画とはまた別次元」であるとされるのである。

先に挙げた池澤夏樹による評は、この「デイベート」という舞台装置こそが、本来小説には馴染みにくい政治問題を文学として成功させた要因であるとして位置づけ、最終章でのデイベート場面を「すばらしい法廷劇¹²」であると評している。そして赤坂自身もまた、この「デイベート」に、「天皇の戦争責任」という「日本人が最も感情的になる主題¹³」を小説として描き切るための可能性を見出したと述べている。

論題は、「昭和天皇は戦争犯罪人である」

(中略)

否定派が心情に反する肯定に立たされたりしたとき、見えてくるものがあると思ったのである。こうすることで感情から自由になれまいかと思ったのである。これを、ふたたび行われる東京裁判に見立て、私は書いた。

果たして、そこで浮かび上がってきたのは、自分自身にさえ思いが

けなかった、自分の感情だった。(『愛と暴力の戦後とその後』第一章、二九頁)

だが、右記の引用から読み取れるように、「デイベート」という装置によって浮かび上がってきたのは、作者によって対象化つまり相対化された「日本人」の感情などはなく、決して対象化されているとは言いがたい、剥き出しの作者の感情そのものであったのではないだろうか。すなわち、先に見たような、いまなお精算されることのない戦争責任をめぐる問題を、ゲームに勝つための障壁、あるいは相手方が「論破」のために使う厄介な道具として捉えてしまうような感情である。『東京プリズン』の最大の問題は、この「デイベート」という装置を選び取ってしまったことそのものにあるのではないか。

この点に関連して踏まえておきたいのが、倉橋耕平『歴史修正主義とサバルチャー 九〇年代保守言説のメディア文化』(青弓社、二〇一八年二月)が指摘する「歴史修正主義者」は「歴史」をテーマとした「デイベート」を好んできたという事実、およびそれに対する以下のような批判である。

「歴史デイベート」という知性の問題性はどこにあるのか。第一に、真実よりも説得性が重視されるのであるから、反論のための知識をもたないものには沈黙を強いる。第二に、「さしあたりその場の議論で主導権を握ればいいのだから、根拠はもつともらしいものであればよ」く、相手の「言葉」を詰まらせた時点で、「勝ち」ということだけが目的化される。つまり、「事実」に基づかない「虚構」であつても、内部の論理的整合性が保たれていて説得力があればいいということになる。(中略)第三に、歴史資料や当事者の問題など、まったく価値と重みが異なるものをすべて「言説」として価値を一元化し、(と

きには、揶揄や妄想でも）同じ組上で扱ってしまう。すなわち、歴史的事実に対する証明責任を追うことなく他者を「言いくるめる」ことそれ自体が目的の中心ということになる。⁽⁵⁾

このような、相手の沈黙を先に促したほうが「勝ち」、言いくるめられた方が「負け」という「デイベート」の論理において、「負け」た側に残るのは、相手に対する敗北感と恨めしさだけである。赤坂は、『愛と暴力の戦後とその後』において、歴史上の「東京裁判」、あるいは敗戦後の日本に対する世界からの非難それ自体が、こうした「デイベート」の論理を内包したものであったと理解しており、そこで「負けた」側の屈辱と敗北感を、彼女の「母」の姿に見出している。しかしながら問題と思われるのは、そのような母の姿を当時の「日本人」全体に共通するものとして理解し、その痛みに寄り添おうとする彼女自身が、その「デイベート」の論理に捕らわれてしまっているという点である。

「ねえママ、民間人の虐殺ということなら、広島や長崎への原爆や、東京大空襲のほうが、全くの非道だとは、思わない？」

（中略）

「うん……でも、『お前ら真珠湾やったじゃないか』と言われたら、仕方ないわ」

と母は言う。

「なぜ仕方ないの？宣戦布告しない戦争の例はたくさんあるし、それに対していちいち怒り狂った国ってのは少ないよ。真珠湾は軍事施設への正確なピンポイント爆撃なのだし、絶対悪とみなすいわれはどこにもない」

私は返す。（『愛と暴力の戦後とその後』第一章、三六頁）

「ねえママ、言っておきたいんだけど」

と、二〇一一年の八月十五日、昼の日盛りに妙な衝動にかられて炎天下で母に電話する。

「真珠湾はだまし討ちではない」という判決が、東京裁判で下りているのよ」（同、四七頁）

ここには、赤坂が「母」（それは赤坂の場合、敗戦を経験した「日本人」すべてに敷衍される）の沈黙と思考停止を破るべく働きかけようとすればするほど、彼女自身が日本とアメリカという閉じられた二項対立の世界に縛られ続けてしまうということが示されている。「東京裁判」を「デイベート」として描き直すということは、彼女自身が見出した表現上の舞台装置であるが、赤坂はそれを単なる「仕掛け」の一つとして操作しきれていないのではないか。「日本だけが悪かったのではない」と、しつこく「母」に語り続ける赤坂の姿からは、彼女自身がその装置に支配され、「母」と共にそのトラウマから抜け出せないでいる痛々しさを感じてしまうのである。

三. 二つの世界と二つの言語

次に、『東京プリズン』内における二つの世界と、そこにおける二つの言語＝文体の問題に注目したい。

『東京プリズン』という作品がもつ大きな特徴の一つに、マリが体験する幻想世界の存在がある。第一章において、マリはハイスクールの同級生たちとともに出かけたハンティングで、一匹の不思議な霊性をもつヘラジカと出会い、その肉を食べる。このことをきっかけにして、その後マリは幻想世界への通路を獲得し、そこでかつてアメリカによって迫害された先住民の人々や、ベトナム戦争によって生まれた結合双生児、さらには太古

のアニニズム的世界観における天皇像を想起させる「大君」と呼ばれる存在や、そこに傳く「小さな人々」と出会うことになるのである。

この幻想世界における言葉のあり様に、私は強い違和感を覚える。それは例えば、左記のような場面に現れるものである。

「大君」

私はその人を、そう呼んだ。

周囲にはあの小さな人びとがいた。顕微鏡をのぞきこんだときに輪になっていた人びとだ。彼らは思い思いに動いていた。

しかし私が「大君」と声を発したとき、小さな人びとは結晶のようになり整列した。

私はなぜだか正しい言葉を発したのだ。

大君と呼ばれた人が私を認め、認められたそのとき私の全存在が認められていると感じ、涙がこぼれた。私は愛に包まれ、自分をつてなく強く感じた。

——我が子よ。

大君は私に行った。そう聞こえたのではなく、直接意味が、いっぺんに、流れこんできて、そこには、我が子、という言葉にしたらひとことの中に、万もの状況や感情があった。それらが私の中でかたちをとると、美しい幾何学のようになった。

「母上！」

感極まって私は言った。なぜだか、母、と。

母という、胸を点く響き、甘さ、深さ。なぜ母と呼んだかはわからない。なのにそれが正しいと感じている。（『東京プリズン』第六章、二九七頁）

傍線部に明らかかなように、幻想世界におけるマリは、その世界の論理や、

多くは擬古文調の芝居がかった言葉づかいやコードを、なぜかは分らないけれどすでに知っている。また二重線を引いた部分では、この世界がもはや言語という媒介を必要としない、「意味」が直接に流れ込む世界であるということが描かれている。つまり、この幻想世界において、言語は透明なのであり、マリと「他者」との間の壁は存在しない。マリはこの世界において、純粋な「意味」だけをやりとりすることができるのである。

こうした『東京プリズン』における幻想世界とそこでの言語のあり様に、なぜ違和感をもつかというと、次に見るような言語の不透明性―物質性あるいは「他者」性と言い換えられる―そしてそれによる世界を理解することの困難さこそ、赤坂がその戦後日本論において繰り返し強調していることではなかったかという疑問があるためである。

この本を書いていて、途中、何度も叩きのめされる思いがして、筆が止まった。いっそ、書くことなどすべてやめてしまいたいほどの絶望を感じたこともある。すべて無駄に思えて。自分が立っている場所そのものが、本当はなかったことに突然気づくようである。

私たちは、あまりにわかっていない。

他ならぬ、私たち自身を。

（中略）

たとえば。後述するが、「憲法」。

「憲法」ということは自体は、物心ついてからずっとそこにあつた。あるもんだと思っていた。

（中略）

しかし、四十も半ばを過ぎてはたと考えてみたら、「憲法」の意味を知っているとは言えなかった。

国語辞書で引いて出てくる意味ではない。「憲法」の「憲」の字の

意味を、私は知らなかったのである。言葉の成り立ち自体を、知らないのだ。（『愛と暴力の戦後とその後』第二章、五〇頁）

ここで赤坂が言わんとしているのは、「漢字」という「他者」の言語を内に抱え込んでいる日本語の「他者」性のことであり、それが認識された瞬間に立ち上がる、「わたし」と世界との間の壁の存在である。これまでも自明のものとして、つまり透明なものとして認識していた言葉が、急に不透明な「他者」のものとして立ち上がり、「わたし」を疎外する。それが「わたし」が何度も感じてきた「絶望」というわけである。本エッセイにおいて、赤坂は漢字や英語の「翻訳」を通して形成されてきた日本語や日本社会のあり様を、繰り返し読者に訴えかけるのである。

このような言葉に対する認識それ自体は、極めて妥当なものであり、そしてこの認識は『東京プリズン』の現実世界を描く際にも引き継がれている。しかし繰り返すが、なぜ、そのような言語の「他者」性や不透明性は、「大君」、すなわち天皇が統治する幻想世界においては、忘却あるいは破棄されてしまうのか。次のような場面を見ると、赤坂がこうした日本語の「他者」性に対する「絶望」の先に、かつて一九世紀後半に発生し、さらに戦時下において再発見されたような「原始」の日本語を夢想する国学的発想に、「避難」してしまうのではないかという懸念を抱いてしまうのである（すでに捕らわれていると言ったほうがよいのかもしれないが）。

“I AM TENNOU.”

そう、TENNOUは、^{チンヌウ}皇帝と言いがたきもの、^{テンノウ}天皇と漢字にもなりがたきもの、TENNOUは、^{テンノウ}テンノウと音にするしかないような何か。その音自身が本質を表すというような、そんな名。あるいは、^{コトダマ}言霊。（『東京プリズン』最終章、五〇七～五〇八頁）

実は、こうした赤坂における言葉をめぐる両義性は、本作以前にも指摘がなされている。大塚英志は、「赤坂真理—文学の「不完全自殺マニユアル」としての小説」（『文學界』一九九九年（二月））において、赤坂作品に繰り返し描かれる主に性的交わりをもった男女の非言語的なコミュニケーションのあり様を、「チャネリング」のようなものとし、以下のように述べている。

ぼくは何もニューエイジやチャネリングがオカルトまがいではない、と結論しているのに等しいからだ。コミュニケーションできない「絶望からスタートさせるべき」という主張はわからなくもない。だが、ならばその絶望をまず徹底して描くべきだしましてそう記した直後に非言語的コミュニケーションを持ち出すのはいただけくない。

ここで大塚は、いわば赤坂のことばに対する不徹底さ、そしてそこから導き出される彼女の「他者」との向き合い方における「甘え」を、サブカルチャー未満のものとして批判するわけであるが、私はむしろその「不徹底さ」の背景にあるものに、赤坂に対する内在的批評の可能性があるのではないかと考えている。何が赤坂を「他者」のいない世界に向かわせるのか。何が彼女自身を引き裂いているのかということである。

まとめにかえて

左記のように述べた理由は、『東京プリズン』の場合、マリが幻想世界への入り口を獲得した背景には、同級生のアメリカ人・クリストファー・

ジョンストンによるデート・レイプ（未遂）があるためである。つまり、以下のようなマリとヘラジカとの言語を必要としない交信や一体化には、第二節で確認した「アメリカと日本」の二項対立に重なる形で、犯し／犯されるものとしての「男と女」という二項対立が、暴力的にマリに襲いかかるという看過できない背景があるのである。

命を奪った者と奪われる者とが暴力的にひとつとなり、そこでは私とヘラジカはひとつで、ヘラジカの中に入った私がヘラジカと土に還り、私たちの肉は虫や微生物たちによって少しずつ持ち去られる。

（中略）

肉を呑みこんだら消化プロセスは逆戻りしない。

それは私になる。

あなたは、私になる。

声がかかる。

——善きかな。

思い出す。

ヘラジカは、腹を上にも、前後の脚を開かされて、森の木の枝に吊るされていた。

それが女に似ていると思いついたのは、帰りの車の中であった。

男の前で、腹を天に向け脚を大きく広げる。（『東京プリズン』第一章、六〇～六一頁）

そしてこの瞬間から、マリの中ではこの男女の対立が必然的に孕む女性嫌悪（ミソジニー）が内面化されることになる。「東京裁判」を模した

デイベートにおいて、相手方のクリストファー・ジョンストン（マリを襲った張本人）に、近代における天皇は「女」であったと言われた瞬間、彼女は「震えるほど」の怒りに襲われる。それは、「自分の中の乱暴な論法に、自分でびっくりした。なぜ男じゃないと言われたら、辱めと感ずるのか。私だって男じゃないのに」と語られる通り、説明のつかない「わけのわからない情動」（以上、『東京プリズン』最終章、四四九～四五〇頁）として描かれる。

さらに、実はこの点においても、マリは作者赤坂の分身である。つまり、「デイベート」を小説の舞台装置として選びつつも、その「論破」の論理に彼女自身が捕らわれていたように、赤坂は次のようになかつて抱いた「わけのわからない情動」を、未だ対象化できていないのではないか。

元兵士の一人に頭を下げられたことがある。

「私は女性に期待しています。今、平和活動をしているのはだいたいが女性です。この間もある集会で女の子に言われたんですよ、『戦争でいちばん苦労するのは女だ、男の人は戦争に行けばいいけど、女は乳飲み子を抱えて逃げ惑うんだ』って。その通りです」

私は切れそうになった。この人なに言ってくれちゃってんのかと
思った。そんな女にまで頭を下げるな！威張ってもいいけど前線に
行く男のほうが大変だ！と、言葉は行き場なく沸騰した。（『モテた
い理由―女の業と男の受難』終章、講談社、二〇〇七年十二月）

ここに私は、赤坂における「ある過剰さ」を見る。それは先述した「痛々しさ」と同義といえる。おそらく、赤坂はある何かを引き受けてしまったのではないだろうか。そしてそれこそが、彼女を幻想世界へ、ひいて

は「天皇」へ向かわせるのではないか。その引き受けてしまったものとは、
一体何なのか。引き続き検討したい。

- 一 池澤夏樹「小説にはこんなこともできるのか」（初出『毎日新聞』
二〇一二年八月五日、加筆後に河出文庫版『東京プリズン』（二〇一四
年八月）の解説として収録）。その他の好意的な評価に、『日本経済
新聞』二〇一二年八月二二日掲載の田中弥生による評、江南亜美子「小
説は時間を超えて—赤坂真理『東京プリズン』、鹿島田真希『冥土め
ぐり』（『小説upper』二〇一二年九月）等が挙げられる。
- 二 内田樹編『日本の反知性主義』（晶文社、二〇一五年三月）、赤坂真理・
原武史「対談・「ポスト平成」の皇室論」（『文學界』二〇一九年二月）
ほか。
- 三 前掲、池澤夏樹「小説にはこんなこともできるのか」。
- 四 『愛と暴力の戦後とその後』第一章、二八頁。
- 五 前掲、倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 九〇年代保守言
説のメディア文化』一〇二頁。